

採用前の「介護体験研修」サービスで 外国人と施設のミスマッチを防ぐ

（株）タツフト



慢性的な人手不足に陥っている介護人材に対し、政府は外国人就労者の受入拡大を見込んだ施策として法律改正を行い、技能実習介護や特定技能（仮）を創設するなど、人材難解消に向けた方策に注力している。本稿では、こうした動きに連動し、独自の介護外国人マッチングサービスを展開している（株）タツフトのサービス内容についてレポートする。

外国人採用、ミスマッチの課題解決に 採用前のステップが必要

（株）タツフトは、介護現場の人材不足と外国人採用の課題を解決するため「インターシップによるマッチングサービス」を提供している。

そのスキームはこうだ。まず現地の大学や医療専門学校で介護を学んでいる学生、あるいは卒業して施設で働いている人を受け入れ、日本の施設で介護体験研修を3カ月間行なう。その間の生活費、住まい、渡航費用などは受け入れる施設側が負担。研修終了後はいったん帰国し、当該施設で本格的に働く希望があれば、各種の手続きを経て技能実習生として再

来日するというスキームで、同社は入り口となる介護体験研修のアレンジを行なうものである（別図）。

同社代表取締役の笹尾隆文氏は「人材難を乗り越えるために、経営層は外国人の力が必要だと考えていますが、現場はその採用にさまざまな不安を感じています。また技能実習生として受け入れても、お互いのミスマッチから離職してしまうケースもあります。こういった課題を解決するには、採用前に1つステップを設けることが有効だ」という結論に達しました」と、サービス創設の背景を語る。

本事業を通じて受け入れる研修生は、中央アジアのキルギス共和国の学生など、大手航空会社に勤務した経歴をもち、また個人的にも世界中を旅した経験のある笹尾氏は、世界各国の知人を通じて日本で働きたいと考えている人たちを探すなかで、キルギスが技能実習に関して競争相手の少ない国であり、自国での仕事に不足しているため、優秀な人材からの応募も多いことを知る。「昨年9月にキルギスを訪れ、現地の送り出し機関や彼らが学んでいる学校、研修を行なってい

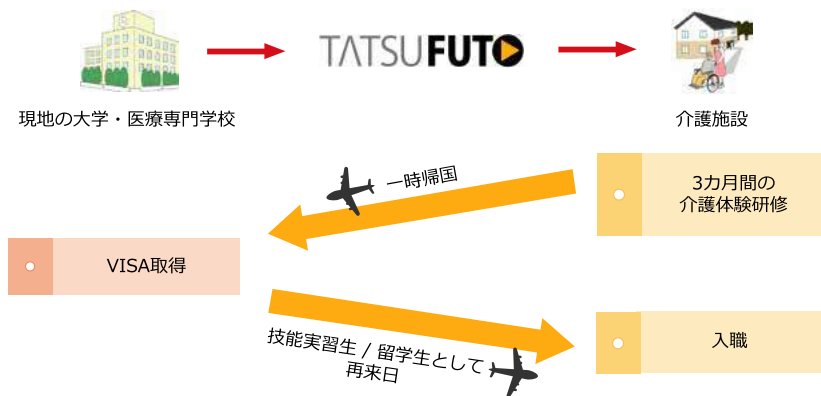
る施設などを訪問しました。また学生たちにも直接会って話をしましたが、日本語を真剣に学んでおり、日本で働きたいという気持ちも他国の人たちよりも強い。それが決め手になりました」と笹尾氏は話す。

そこで今年2～3月に、現地での面接と日本でのスカイプ面接を順次実施、すでに6月から第1弾の研修生15人を受け入れ、東北、北関東、関西の4法人、計5施設で研修中である。現在キルギスでのパートナー校は3校で、今後もふやしていくという。「外国人の受け入れに懐疑的な現場も少なくありません。しかし、介護体験研修の3カ月間がいれば『お試し』となつて、ここで働きたいのか、働いてほしいのかをお互いに確認でき、ミスマッチを防げる。スムーズな就労を実現するうえで有効な手段となります」と笹尾氏は強調する。

「技能実習生として採用したい」 職場や地域にも好影響

本プロジェクト第1弾の受け入れ施設の1つが、山形県の社会福祉法人友愛会である。医師であった前理事長が、障害者の社会参加の機会として何らかの施設が必要と考え、約7年をかけた1991年に障害者支援施設を開業したのがスタート。現在は県内で障害者支援施設3施設、特別養護老人ホームやデイサービスなど

別図 介護外国人マッチングサービス



代表取締役
笹尾隆文氏

高齢者向けの4施設を運営している。同法人の総従業員数は261人（8月1日現在）。人材獲得については、年4回の説明会開催はもとより、法人Webサイトのリニューアルやスマートフォンへ



職員の指導のもと、笑顔を決やらず介護実習に取り組む4人の研修生



社会福祉法人友愛会
理事長
荒井与志久氏

の対応など熱心に取り組んでいる。実務面でも、利用者にも職員にも優しい介護を目指して委員会を組織し、ノーリフト・イングをはじめとするプロフェッショナルな介護を推進、現状の離職率は約8%とのことだが、理事長の荒井与志久氏は「離職率を下げるには研修や教育が重要です。当法人でも働きやすい職場環境づくりも含めて、これに全力で取り組んでいます」と話す。

その一方で、同法人では中期計画において今後新たに5〜6施設を開設する方針を掲げることから、人材の確保は喫緊の課題である。そこで外国人の活用も視

野に、ベトナム人技能実習生の面接も行ってはみたものの、その後なかなか進捗せず苦慮するなか、荒井氏はタツフトのサービスを知った。「外国人受け入れの方法として技能実習生やEPA（経済連携協定）は知っていましたが、まずは介護体験研修を通じてお互いに相手を認めるのは、双方にとってリスクを減らすよいアイデアだと感じました。研修生の生活費等の負担は発生しますが、それ以上に現場に好影響を与えるだろうという期待もありました」と荒井氏は話す。同法人ではまず10数人のキルギス人学生を対象にテレビ電話を通じた面接を行

ない、そのうち4人に決定。今年6月から障害者支援施設「すげさわの丘」での介護体験研修中で、食事、入浴、排泄等、職員と同様に介護全般の仕事を職員の指導のもと行なっている。「外国人の受け入れは初めてであり、受け入れ前は職員へのしわ寄せが大きいのではないかなど、不安があったのも事実ですが、準備をして実際に受け入れてみると予想以上にスム

ーズに進んでいます。キルギスの研修生は非常に能力が高く、何にでも興味もち取り組み、教えたことをすぐに覚えてくれますし、すでに重要な戦力となっています。日本側の職員も『外国人スタッフにこれだけできるのだから、私たちはもつとできる』と触発されているようで、職場全体が活性化し、より明るく楽しい雰囲気になっています」と荒井氏はその手応えを語る。

研修生は日本語も熱心に学んでおり、施設利用者からも「私達が日本語を教えてあげよう」と毎日宿題を出したり、漢字を教えたりと、積極的な関わりがもたれている。友愛会では地域住民に施設に来てもらう地域交流会なども開催しているが、そうした機会を通じて研修生も地域住民と交流しており、「日本文化を教えてあげたい」と地域のお茶会や町内会の盆踊り大会等にも招かれたそうだ。外国人と接する機会が多くない地方において「地域社会にも国際交流の契機を生んでいるのではないか」（荒井氏）。

4人の研修期間は8月末で終わるが、職員の間では「すでに貴重な戦力」「いないとさみしくなる」などの声も聞かれるとのこと。荒井氏は「4人がここで働きたいと思ってくれるなら、ぜひ技能実習生として戻ってきて欲しい」と話す。キルギスからの研修生も「自国では経験できない貴重な体験をさせてもらって

る」「大変な仕事ですが、日本の介護技術を習得したい」「夜勤も経験したい」と前向きだ。今後、技能実習生となるには、日本語能力試験で基本的な日本語を理解することができるレベル「N4」に合格しなければならぬ。再来日が実現するとすれば、12月の試験、1カ月後の合否発表、その後現地で手続きや日本の監理団体による研修など約3カ月を経て、最短で来春になる見込みである。

タツフトでは、友愛会に対し、継続的な研修生の受け入れについても提案している。友愛会側でも、職場の活性化などの効果を聞いた他の高齢者施設等で研修生を受け入れたいという声が上がっており、次の介護体験研修を検討している。「働き手がいけないことは、われわれのビジネスにとって一番のボトルネックとなる問題ですが、少子高齢化が進むなか、人材確保の選択肢は多くありません。優秀で意欲的な外国人にも期待したいのですが、お互いにリスクもある。技能実習による本格的な受け入れ前にマッチングができる介護体験研修サービスは、施設にも日本で働きたい外国人にもとても適切な仕組みだと思います」と荒井氏。

タツフトでは、12月スタートの18年度第二次募集を開催中で、8〜10月に面接を順次実施している。また、翌年より4回の介護体験研修を予定しており、随時申込みを受け付けている。

※問合せ:(株)タツフト Tel.03-3779-6186